〔大東文化大学所蔵日本書跡解題〕（古谷稔監修／執筆・髙橋利郎）

(1) 和歌短冊　大口周魚筆

① 制作年　明治～大正時代
② 材質・形状・員数　彩箋墨書　一枚
③ 本紙寸法　縦三六・二センチメートル　横六・〇センチメートル
④ 所蔵番号　1113165340（大東文化大学図書館蔵　平成十八年度受入）
⑤ 釈文　（題）松上雪
（本文）たゝひとりふゝきをうけてをゝしくも
かせのおもてにたてるまつかな　周魚

具引きした白色の料紙に金泥で霞を引き、細かな金砂子を天地を中心に雲形に撒く。上部に題を書き入れ、歌は上の句を一行に、下の句と署名を一行に収める。歌会では題の執筆者が詠み手と異なる場合があるが、この短冊は題も含めて周魚の手になる。歌は『大口鯛二翁家集』（ちくさ会　昭和二年）の冬の部に「雪中松」の題を伴って所載されるもので、明治四一年から四四年の間に詠まれている。

周魚（一八六四―一九二〇）は尾張国愛知郡の生まれ。明治二二年に上京、宮内省に入省して御歌所に勤め、御歌所寄人の伊東祐命、所長の高崎正風を師とした。大正九年、正風の歌集編集のために滞在していた長野山田温泉で急逝した。

周魚は、古筆の造形的な側面に大きな意味を見出したことでも知られ、研究の成果は、『書苑』（法書会）で紹介された。彼が平安古筆中の白眉、「本願寺本三十六人集」を発見したことはあまりに有名である。周魚の書道史研究の方法は門弟の尾上柴舟に引き継がれ、各種の『書道全集』などに結実した。

短冊に見られる書は高野切二種の書風をもとにしたもので、この時代の能書としては、古筆にもっとも忠実であるといえる。

(2) 和歌短冊　尾上柴舟筆

①制作年　大正～昭和時代
②材質・形状・員数　彩箋墨書　一枚
③本紙寸法　縦三六・二センチメートル　横六・〇センチメートル
④所蔵番号　なし（大東文化大学書道学科蔵　平成十六年度受入）
⑤釈文　さくらさくはるのみそのゝおほみゆき
みよとこしへとをかみしものを　八郎

菖蒲色の染紙に、金泥の霞を引き、いわゆる赤金・青金の砂子を雲形に撒いている。一行目に上の句、二行目に下の句と署名を収める。歌に題はなく、「八郎」の署名をともなう形式から推して自詠歌と考えられるが、柴舟の詩歌を集めた『尾上柴舟全詩歌集』（短歌新聞社平成一七年）には収載されていない。短冊の上部を三分の一ほど空けて執筆するのは、室町時代以来の短冊の書式に則るものであり、上部にはしばしば題が書き込まれる。

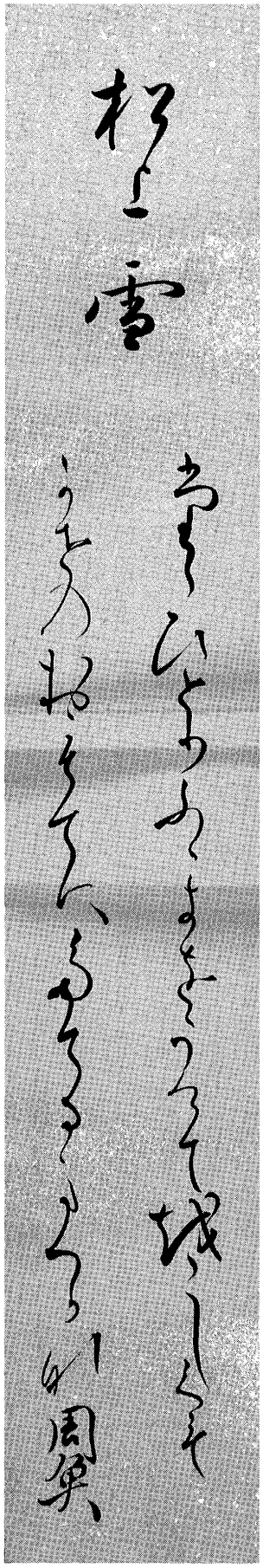
尾上柴舟（一八七六―一九五七）は岡山県津山の生まれ。上京して大口周魚の門に入り、歌を学ぶと同時に古筆の鑑賞や書についても知識を得た。第一高等学校に入学して落合直文に入門する。東京帝国大学大学院を経て女子高等師範学校・女子学習院などの教授を務め、歌人、国文学者そして書家として活躍した。豊道春海とともに昭和前半期の書壇を代表する人物である。

柴舟は、宮内省や宮家で主催する観桜会にしばしば参会している。この歌はそのような場で詠まれたものである可能性がある。

書は、大正一一年に制作された「枕草子絵巻」（高取稚成画・個人蔵）の詞書に近く、柴舟が「粘葉本和漢朗詠集」にもっとも傾倒した時期のものであると考えられる。歌の内容と考え合わせると、この短冊は、大正時代の末期から昭和初期にかけての制作だろう。

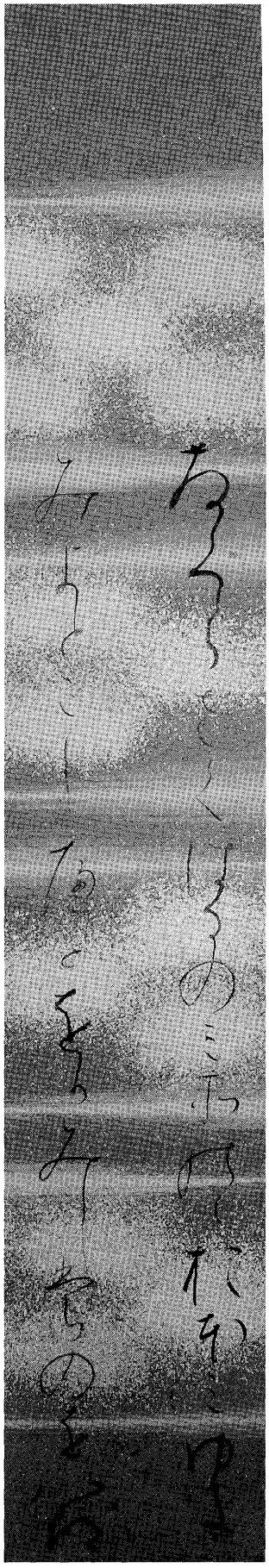
(1)

和歌短冊　大口周魚筆



(2)

和歌短冊　尾上柴舟筆



(3) 和歌短冊　若山牧水筆

① 制作年　大正時代
② 材質・形状・員数　紙本墨書　一枚
③ 本紙寸法　縦三六・二センチメートル　横六・〇センチメートル
④ 所蔵番号　なし（大東文化大学書道学科蔵　平成十六年度受入）
⑤ 釈文　わが登る天城のやまのうしろなる
　　不二の高きはあふぎ見飽かぬ　牧水

白紙の短冊に、上の句を一行、下の句と署名を一行に収める。伝統的な書式では、短冊に和歌一首を収める場合、上部三分の一ほどをあけ、題を書く。題を書き入れない場合も上部はあけたままにするのが通例だが、この短冊はそれに則らない。丸みを帯びた文字が、紙面いっぱいに放ち書きにされ、濁点も書き込まれている。内側に広い空間を抱え、水平に構える文字は、藤原定家を連想させる。

牧水（一八八五―一九二八）は、宮崎県臼杵郡東郷村に生まれた。延岡中学校を経て早稲田大学に入学、明治三七年に尾上柴舟に入門して前田夕暮や三木露風らと車前草社を結成した。はじめての歌集『海の声』には柴舟の序を見ることができる。

柴舟は、短歌誌『水甕』に古筆の臨書と解説を連載し、書と歌の表現に通底するものを追究しつづけた。その門下にありながら、牧水はさほど平安古筆に興味を抱かなかったようである。平安文学の研究を専門とした柴舟と、内面的な寂寥感をたくみに表現する近代歌人・牧水との歌に対する姿勢の違いが、書の上にも現れている。近代的な国語表記に準じた牧水の書きぶりは、大口周魚ら旧派歌人とは対照的である。

この歌は、大正一一年に詠まれたもので、最晩年の歌集『山桜の歌』（新潮社大正一二年）に収録される。

(4) 和歌短冊　北原白秋筆

① 制作年　昭和時代
② 材質・形状・員数　彩箋墨書　一枚
③ 本紙寸法　縦三六・二センチメートル　横六・〇センチメートル
④ 所蔵番号　1113165359（大東文化大学図書館蔵　平成十八年度受入）
⑤ 釈文　小山田ははや水はれりいまたしも
　　落葉松のうれはめふかす　白秋

黄に染めた料紙に、金泥の霞引きを施し、上の句を一行、下の句と署名を一行に収める。牧水の短冊と同様に、伝統的な書式には則らない。二行目の書き出しは、一行目よりも低く、形式に縛られない白秋の自由な姿勢を投影している。

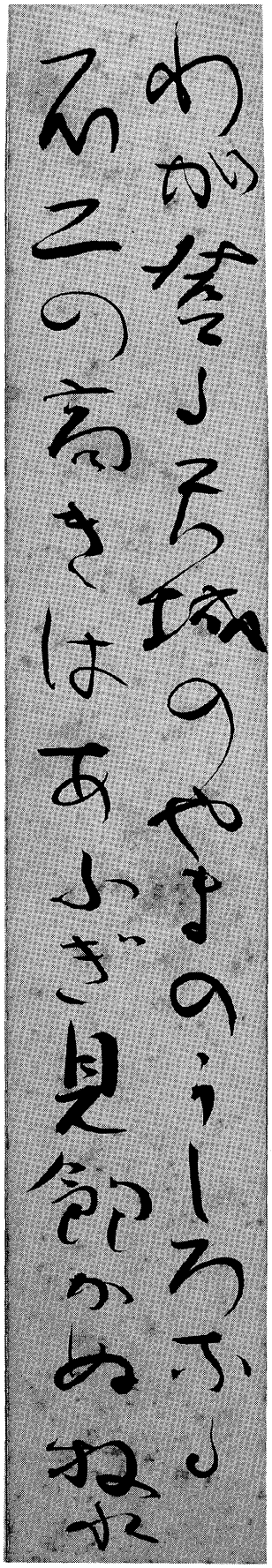
白秋（一八八五―一九四二）は福岡県山門郡沖端村の生まれ。はじめ短歌に取り組んだが、満足できず、一時期詩作に移行したこともある。早稲田大学で若山牧水や土岐善麿らに出会い、与謝野鉄幹の『明星』で活躍、明治四〇年の九州旅行を経て、代表作となる詩集『邪宗門』を発表した。高村光太郎や石井柏亭らと結成した「パンの会」の活動によって耽美主義的傾向が強まる。大正二年に初の歌集『桐の花』を発表。鈴木三重吉の『赤い鳥』創刊をきっかけに童謡の創作に取り組み、「この道」「待ちぼうけ」などの作詞でも知られる。昭和一〇年に多摩短歌会を結成して、短歌誌『多摩』を主宰した。

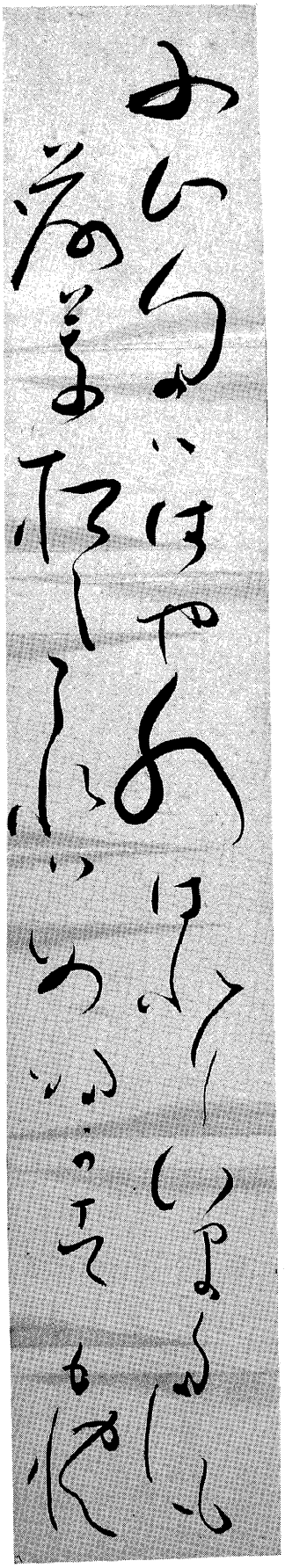
白秋の書には、歌作が活発になった壮年期以降のものが多い。その書には暢びやかな筆遣いが見られるが、変体仮名も多く、文字の崩しは独特で時に解読に苦心する。晩年の作と考えられるこの短冊にも、白秋の特徴が顕著に現れている。

細身で気脈を保ちながらも連綿を抑えた表現は、良寛の書と通じる。実際、自宅には良寛の「火の用心」の書を飾っていたことが知られている。これを入手するために長岡で半切を二〇枚ほど執筆したという。

(3)

和歌短冊　若山牧水筆



(4)

和歌短冊　北原白秋筆